

# “ふじのくに”づくりへの決意

## 宣言

“ふじのくに”の柱は富士山である。我々は“ふじのくに”づくりへの決意を以下のように表明する。それらはいずれも富士山から導きだされたものである。

- 一、我々は、物心ともに豊かな「富士の民」ないし「士民」として、「富国有徳」をもって、“ふじのくに”づくりの理念とする。
- 一、我々は、生活環境においても自然環境においても美しさを重んじる「美の文化・文明」をつくりあげる。
- 一、我々は、「和」を貴び、「和の文化・文明」を築く。
- 一、我々は、自然に対して畏敬の念と謙虚な態度をもって、危機管理を最優先し、防災の先進地となる。
- 一、我々は、大地の表情に合わせて季節感を取りもどし、大地の恵みを大切に  
する。
- 一、我々は、人間のみならず、すべての存在をかけがえのないものとして大切に  
し、命を寿ぎ、寿命を全うできるように、心を砕く。

我々はこの決意のもとに、物心ともに豊かな富国有徳の社会を目指し、「和」を貴んで世界の平和づくりに参加し、「美」を重んじて地球環境の美化に貢献することを誓う。

白雪を冠した霊峰を仰ぎ見ることのできる今日の佳き日、富士山のごとき日本一高い志をもって、「住んでよし訪れてよし」「生んでよし育ててよし」「学んでよし働いてよし」の理想郷を目指し、我々はこの“ふじのくに”づくりのスタートを宣言する。

# “ふじのくに”づくりへの決意 全文

## <序>

日本の歴史は、その淵源をはるか一万年前の縄文時代にさかのぼり、日本列島の北には三内丸山遺跡、南には上野原遺跡、中央では本県の大鹿窪遺跡にみられるような、人類史において最も長く高度な土器文化を発達させたが、ほぼ2000年前の弥生時代には、登呂遺跡に代表される稲作文化を発展させ、710年には都を藤原京から平城京に遷し、以後、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸と中心地を変えることによって新しい時代を次々と切り開き、明治維新となって、都を江戸に遷して東京と改名し、「東京時代」に入り、今日に至っている。

この間、日本の社会と文化は、人類が育んだ東と西の文明の波に根底から洗われることによって、洗練の度を高めてきた。

まず、奈良時代から室町時代までの800年余り、遠くはユーラシア大陸の東西を結ぶ草原とオアシスのシルクロード、また、南洋のヤシの実の流れ着く黒潮の海上の道など、様々な道を伝わってきた多彩な文物を受け入れ、近くは韓半島と大陸中国の東洋の文化・文明を積極的に受容して、それらを生活文化の中に取りこんで自家薬籠中のものとなし、ついに室町時代の終わるころには、東洋諸国からもはや学ぶものがないほどに成長した。日本は1600年頃には東洋文明を卒業したのである。

日本は、その文化的自立を内外に示すかのごとく、それまで東洋文明を受容する核となり、かつ政治・経済・文化の中心・京都にあった首都機能を、関東の江戸に据えた。江戸時代の日本は、海外における争乱をよそに、「パクス・トクガワーナ（徳川の平和）」と形容される天下泰平を謳歌し、勤勉革命によって土地の生産性を世界一のレベルに押し上げて経済社会を発達させ、茶の湯、生け花、数々の工芸・農芸品、数寄屋づくり、庭づくり、能・狂言、歌舞伎・浄瑠璃、浮世絵、武士道など、日本独自の文化の花を咲かせ、日本文明の基礎を築いた。

続いて、黒船来航を機に、西洋の文物を受容し、国力を東京に集中し中央集権体制のもとで130年余の近現代史を歩み、この間、アジア最初の産業革命を遂行し、早くも19世紀末までにアジアで唯一、西洋の先進諸国に伍する近代文明国になり、ついに20世紀末までに西洋のどの国にも勝るとも劣らない近代文明の最先進国になった。日本は西洋文明をも卒業したのである。

東洋文明は京都に息づき、西洋文明は東京に花開き、日本列島の津々浦々に、それら東西両洋の文明を取り込み終わって、21世紀を迎えている。日本の課題は東西文明を調和させ、人類社会の平和と発展に貢献することである。

京都と東京とを結ぶ東海道は、東西の文化が交流する幹線であるが、静岡県は、東海道の中央にあって、東西両洋の文化が交流し融合する土地柄を持ち、東西文明の調和を実現する「場の力」を備えている。我々はその潜在力を発揮し、東西文明の調和を図るべき文化的使命を有する。その使命を発揮するのに、静岡県は日本の歴史を背景にした地の利がある。

静岡県は明治4年の廃藩置県によって日本が中央集権国家体制を整えるなかで孜孜の声をあげた。府県制度は中央政府の出先機関として創設されたが、静岡県は近代日本の縮図といわれ、立派にその任を果たし、日本の発展に寄与してきた。しかし、時あたかも、国内的には、東京一極集中の中央集権体制の歪が大きくなって地域主権に向けた動きが強まり、国際的には、草の根レベルで人々が交流するグローバル時代を迎えて民主主義が広く人類社会に浸透し、これまでの中央政府同士の関係にとどまらず、地方政府間の国際的連携も格段に進み、地方政府の果たす役割は一段と増している。

国内的にも国際的にも地方政府の役割が増し、まさに天の時が熟した今日、地の利と人の和を加えて我々は、その流れに棹さそうと思う。そして東京政府の出先機関として生まれた都道府県制度の従属的地位を脱し、“ふじのくに”というアイデンティティを持つ地域を、この地に平和裡に建設し、他地域にも先駆けて地域自立を実現し、新しい日本づくりのモデルになろうと思う。

なぜ、“ふじのくに”なのか。万葉の歌人・山部赤人が「天地の分かれし時ゆ神さびて高く尊き駿河なる富士の高嶺を・・・語り継ぎ言い継ぎゆかむ」と詠いあげたように、古来、日本人は富士山を霊峰として、神のごとく畏敬し、信仰と芸術の源泉としてきた。霊峰・富士山を擁する静岡県は、富士山を想う心がことのほか深く“ふじのくに”の別称を持っているからである。加えて日本各地には、それぞれの地域の山を霊峰・富士山に見立てた「ふるさと富士」があり、その数は北海道から沖縄まで340余りもある。日本は文字通り「富士の国」である。我々は“ふじのくに”をローカルにしてナショナルな新しい日本のアイデンティティとする。

## < “ふじのくに” づくり宣言 >

“ふじのくに”の柱は富士山である。我々は“ふじのくに”づくりへの決意を以下のよう  
に表明する。それらはいずれも富士山から導きだされたものである。

一、富士山の「富」は物の豊かさを、「土」は有徳の人物を意味し、その字義を踏まえて、  
我々は、物心ともに豊かな「富士の民」ないし「土民」として、「富国有徳」をもって、  
“ふじのくに”づくりの理念とする。

一、富士山は、地球46億年の造山活動の傑作であり、比類のない自然景観をもつ。その  
景観から導き出される価値は「美」であり、我々は、生活環境においても自然環境  
においても美しさを重んじる「美の文化・文明」をつくりあげる。

一、富士山は、だれが、いつ、どこから仰いでも最高峰である。だれにとっても、それは理  
想や目標のシンボルになり得る。一人ひとりに「それぞれの富士（理想・目標）」が  
ある。そのどれをも許容する富士の姿はまことに「多様性の和」である。我々は「和」  
を貴び、「和の文化・文明」を築く。

一、富士山は活火山であり、人間にそれを制御する力はない。我々は、自然に対して畏敬  
の念を育み、謙虚な態度を失わない。同時に、危機管理を最優先し、防災の先進地と  
なる。

一、富士山は春・夏・秋・冬で表情を変える。我々は大地の表情に合わせて季節感をと  
りもどし、大地の恵みを大切にする。

一、「ふじ」は「富士」のほか「不二」とも「不死」とも表記される。不二は「オンリーワ  
ン」、不死は「不老長寿」と読み替えられる。生きとし生けるもの、どれ一つとして同  
じものはない。我々は、人間のみならず、すべての存在をかけがえのないものとして  
大切に、命を寿ぎ、寿命を全うできるように、心を砕く。

最後に、富士山は、もとより“ふじのくに”の土民だけの財産ではない。日本が先人から  
引き継いできたものであり、人類社会の共有財産でもある。我々は“ふじのくに”づく  
りに向けた決意のもとに、物心ともに豊かな富国有徳の社会を目指し、「和」を貴んで世界  
の平和づくりに参加し、「美」を重んじて地球環境の美化に貢献することを誓う。

白雪を冠した霊峰を仰ぎ見ることのできる今日の佳き日、富士山のごとき日本一高い  
志をもって、「住んでよし 訪れてよし」「生んでよし 育ててよし」「学んでよし 働い  
てよし」の理想郷を目指し、我々はここに“ふじのくに”づくりのスタートを宣言する。

平成23年2月23日

ふじのくに土民代表 静岡県知事 川勝 平太